

## RとNのカァディスからの手紙（102）

### 2006年4月21日

皆さん、こんにちは。

メール版第1号はいかがでしたでしたか？ HP版では、アップロードした後、プリントして読み返すと必ずといっていいほど入力ミスや変換ミスに気付いて、急いで訂正、再びアップロード、の繰り返しでした。メール版は一旦送信したら、ハイッそれまで、で修正できません。ヘンなところがあっても、お目こぼしをお願いします。また、スペイン語の表記もなるべく正確を期したいと思いますが、例えば ñ とか á という文字は皆さんのPCでも文字化けせずちゃん并表示されているでしょうか？

---

### 「セビージャのセマナ・サンタ」の巻

セマナ・サンタについてはもうご存知ですね。聖週間という訳語の通り、一週間ぶっ通しで、パソ(paso)と呼ばれるオミコシを中心にした行列がいくつも街を練り歩くと、カトリック教徒にとっては多分クリスマスよりずっと大事な宗教行事です。

パソの上には、棕櫚の日曜日イェルサレムに入るキリスト、最後の晩餐で12人の使徒に語りかけるキリスト、十字架を担いでゴルゴタの丘に登るキリスト、十字架に磔になったキリスト、キリストのなきがらを十字架から下ろす弟子達、大粒の涙をこぼすマリア、そして最後に、復活したキリスト等々、色々の像が乗せられています。夫々の町の夫々の教会ごとに像の意匠は少しずつ違いますが、パソの上の像で受難の始終を再現するんですね。

異教徒、ましてや宗教にはトンと縁無き衆生である私達には宗教的な感慨はさらさらないとはいえ、この行事の壮大なことは毎度の事ですがただただオドロキです。そして行列に参加する人数の多さもさることながら、その行列を見るために集まってくる群衆の数にも本当に驚かされます。

日本で、多少とも宗教的な意味のある行事に、これほどの群集が國中同時に多くの町で繰り出す、ということがあるのでしょうか？ 強いて言うなら、初詣の人波がそれに相当するかも知れませんが、初詣の人混みは神社仏閣の境内に限られていて、しかもひどく混雑するのは一部の有名初詣スポットだけでしょう。そして、その周辺道路まで人で埋まるなんてことも、國中の町でナンテことも考えられませんね。

アンダルシア州はスペインの中でもセマナ・サンタの行事が盛んな所ですが、2年前ご紹介したマラガのと、今回のセビージャのは特に盛大なことで知られています。去年のこの時期は日本に帰ってしまったので見逃しましたが、國中でも一・二といわれる両者を見較べてみたいと思ってセビージャに行って来ました。

とにかく、すごい人出。私達はヒトの多いところを極力避けたので写真で見る限り、ナンだ大したことないじゃないの、と思うかもしれませんが、混みあう場所ではソレはモウすごいもので、文字通りヒトを掻き分け掻き分け、カメラを胸にぶら下げてはとても歩けません。そんな中ではユックリ写真を撮ることも出来なくて、だから、

写真にはそれほど大勢のヒトは写っていないんです。それに、広場を埋め尽くす大群衆などは高いところからの俯瞰でないと把握できません。



これは先週もチョット触れたセビージャのカテドラル(大聖堂)。ここがセマナ・サンタという行事の言わばメイン・ステージです。市内の各教会を出発したパソの行列は街を練り歩いてきてこの大聖堂に入ります。この写真は、大聖堂の裏側で、ここはこのとおりヒトも疎らですが、ここからは見えない大聖堂の向う側にはビッシリ観覧席が作られているし、そのほか立ち見の群衆もパソを迎えます。

セマナ・サンタの大群衆を見ると、若い世代の宗教離れという話はホントカイナと思います。老いも若きも男も女も殆ど差がなく一様に集まっているし、行列にも参加しているんです。この群集の発する熱気、行列を実行するエネルギーは大変なもので、市当局は勿論、各教区の信者の経済的負担も大変なものだろうと思います。

一つのパソごとの行列の参加人数もハンパな数ではありません。大型のパソではソレを担ぐ人数だけで3百人ぐらいのものはザラですから、行列全体では千人を超えることもあるでしょう。そんな行列が毎日6～8組、1週間合計では40組以上が練り歩くわけですから。行列参加者だけだってすごい人数ですが、ソレを見る群集となると連日何十万という人出です。マラガの場合、私達が見に行った日は30万人と発表されていたようでした。セビージャだって多分それに勝るとも劣らないのでしょう。

コレだけの大群衆がアンダルシア州全域の各都市にひしめいている一方、この期間の休暇を利用して国内外への旅行をしている人たちも又ハンパな数ではないのです。去年、私達が一時帰国のためマドリードの空港を出発したのは正にセマナ・サンタに

突入する直前でした。ヒトの数も飛行機の数も処理能力をはるかに超えて空港は殆どパンク状態でした。そのため私達の乗ったルフトハンザ機は出発が1時間以上遅れてしまったのです。

空港ばかりじゃありません。国中の道路網は丁度日本の盆正月またはゴールデン・ウィークと同じで大渋滞。この一週間の交通事故死は176人だった99年のピーク以来減少傾向ではあるそうですが、それでも今年もヤッパリ100人を超えたそうです。海外旅行組や行楽地行きは、まあはっきり言って宗教離れのクチでしょうね。

上の写真の右端の塔はセビージャのシンボルとも言うべき「ヒラルダの塔」です。先週お話ししたように、この大聖堂はメスキータ(回教寺院)を取り壊した後に建造されたもので、「ヒラルダの塔」の下部構造にのみ回教寺院の名残を残しています。

この写真で見える塔の上部はカトリック教徒の手で造り変えられているのです。そのいかにもイスラムっぽい下部構造を見ることが出来る右手奥は、パソが大聖堂から出てくる場所なので観覧席が設けられていて写真を撮ることはできませんでした。

例の「オレンジの木の中庭」も丁度この反対側、建物の向こう側になります。

塔の全容が分かる写真がないかと探したらずっと以前に撮ったものがありました。適当なものではありませんがイスラム寺院当時の片鱗だけは窺われると思います。



どうですか？ 右手の塔の壁面に大聖堂の他の部分とは明らかに異質の紋様が見えるでしょう。ではどこまでがイスラム建築で、どこからがカトリック教徒の手になるものでしょうか？ 大体見当つきますね。

ペルシャ湾方面が騒がしくなってから、回教はすっかりマガマガしいものとされてしまっていますが、コルドバのメスキータの中の大聖堂を見ても、このカテドラルを見ても、シンプルな仏教寺院を見慣れた私達にはカトリックというのもナカナカどうしてかなり禍々しいと感じられてなりません。アラベスクは別として、建物自体はむしろ回教寺院の方がシンプルじゃないでしょうか。



実は今回のセビージャ行きでは「最後の晚餐」のパソを見たいと思っていたのです。

2年前マラガのセマナ・サンタで見たソレがとても新鮮に思えたからです。

「最後の晚餐」というとレオナルド・ダ・ヴィンチの例の横一列の壁画の印象が強いですね。この国へ来てから色々な「最後の晚餐」を目にする機会がありましたが、夫々にキリストと12使徒の並び方が違って面白く思っていました。

マラガでみたパソは、普通に考えてゴク当たり前の並び方、即ち長テーブルの一方の端にキリストが立ちテーブルの両側に居並ぶ弟子達に語りかけている様子を再現したものでした。絵画ではこの並び方では全員の顔の表情は描き得ませんね、だから弟子が長テーブルの両側に居並ぶという構図の絵は見たことがなく、実際的にはむしろ当たり前のこの並び方を見たのはそのパソが初めてで、面白く思ったのです。

セビージャの「最後の晚餐」はどんなだろうか？というのが興味の中心でした。

カァディスにある州政府の観光案内所に行って聞きましたが、セビージャのセマナ・サンタのスケジュールは分かりませんでした。どの町でもパソを繰り出す夫々の教会から大聖堂までの行列の経路と主要地点の通過時間表を小冊子にして観光案内所においてあるのです。コレがあればこのパソを見るにはドコソコへ何時までに行けばいいかが一目で分かります。

ところがソレが手に入らない。何曜日に行けばいいか？ マラガの場合は木曜日でした。金曜日が受難の日(処刑という言葉は使わないんですね)だからその前日が当然という気がします。それで木曜日の午後に出かけたんですが見事にハズレでした。

カァディスへ帰る終電車は21時35分発、だから私達がパソを見ていられる時間は21時前後まで。こんな時間にはこの町のパソ行列は殆ど始まらないんです。特にこの日、木曜は次の日の明け方までぶっ通しという日で、殆どのパソが動き始めるのは日没の21時以後なんです。上の写真のなどはほんの前座みたいなもので、例の「最後の晚餐」のパソが出てくるのは日付が変わる頃らしい。このパソを見送ったらもうソロソロ制限時間一杯、駅まで半分駆け足でぎりぎりセーフでした。



中央の女性二人。この黒装束がスペインの女性の教会関係行事の時の正装らしい。この装束を着た女性が大勢いたのが印象的でした。マラガのときは行列の参加者の中にこの装束を見かけましたが、行列を見るほうにいたのは気が付きませんでした。

後姿ではよく分からないかも知れませんが、頭からかぶっているものは、マンティーヤ(またはマンティージャ=mantilla)といって、後頭部にさした大きな櫛の上からかけるレース編みなどの被り物です。いいものはウン十万円もするらしい。

首の後ろには色々な意匠のマンティーヤの留め金をつけていますが、ソレも銀あり金ありプラチナありで上を見ればキリがないのでしょうか。勿論、真鍮もあるでしょうけどね。この衣装を着けた女性は老若を問わず誇らしげな感じがアリアリ。

この衣装を着て教会に行く、ということがセビージャの女性にとってステイタス・シンボルとなるのかな。エスコートの男性も例外なくダークスーツ。アンダルシアの男性の普段の服装からはかけ離れています。なにしろ銀行窓口ですらポロ・シャツ・Gパンが当たり前という土地柄ですからね。

この後すぐ25日から30日にかけて「セビージャの春祭り」(Feria de Sevilla)、5月3日から14日は「コルドバのパティオ祭り」(Fiesta de Patio de Córdoba)、同じく7日から14日は「ヘレスの馬祭り」(Fiesta de Caballo de Jerez)と有名なお祭りが続きます。

祭りの経済効果のほうが経費より大きいからこそ長く続いているのですが、スペイン人がRのような祭り嫌いばかりでは実行委員は悲鳴を上げるでしょうネ。

\*\*\*

## 「アンダルス」の巻

andaluz と綴ります。女性形は andaluzia です。アンダルシアの、という形容詞、またアンダルシア人・アンダルシア方言、という名詞でもあります。

この間、タルヘタ・ドラーダ(鉄道のシルバー優待券)を最寄り駅・エスタディオ(Estadio)に買いに行きました。日本ならシルバーというところを何故かドラーダ、「金の」と言うのです。このカードを5ユーロで買うと向う一年間鉄道運賃が原則4割引になります。セビージャへ一回往復するともう元が取れてしまいます。一昨年と去年は3ユーロだったのに今年は突然の67%値上げです。

エスタディオの窓口には今まで見たことがなかったオバさんが座っていました。

これまでは大抵若いオニーさんが座っていたんです。

タルヘタ・ドラーダください、と身分証明として例の「タルヘタ・65」を差し出しました。ドラーダは60才以上が使えるカードですから、州政府が65才以上の住民に発行するタルヘタ・65なら年齢証明・居住証明としては充分です。

オバさんはしげしげとカードをかざして見て、Rの顔を見て、「ウーン、アンダルス」と感心したように言うと、ニッコリしてカード発行にかかってくれました。ヘンなハポネスがどうしてこんなカード持ってんだろう、と不思議に思ったんでしょうね。このカードはこれまでも何回かバス駅の窓口で珍しそうに見られたことがあります。日本人でこのタルヘタ・65を使ってバスに乗るヒトはそう多くはないんでしょう。

やがて、新しいタルヘタ・ドラーダができて、じゃあここにサインしてちょうだい、と窓口から書類が出てきました。そして、漢字でサインしているのを見て、ケ・ボニータ!(¡Que bonita!=すてき!)(なサイン)。そして横においてあった自分のバッグをゴソゴソかき回して手帳を取り出すと、ここにもサインして! 書類以外にサインを求められたのなんかはじめて。読み方もローマ字で書いてあげました。オバさんは、エストウペンダ!(¡Estupenda!=素晴らしい)としばし手帳に見入っています。

ところで、ここでアルタリア(Altaria=カアディス発マドリード行特急)の切符買えますか？ あ、それはダメ、カアディスかサン・フェルナンドへ行ってちょうだい。

ヤッパリね。 エスタディオの駅にはこの電車は止まらないからなんでしょう。日本ならどこの駅のみどりの窓口でも新幹線の切符が買えますね。その駅に新幹線が止まるか止まらないか、なんて関係ありませんよね。

この辺がスペイン鉄道の分かりにくいところ。おんなじ路線を走っているのに、近郊線・地方線・中長距離線は全然別の運賃立てだし、切符も夫々に違います。タルヘタ・ドラーダの割引の仕方も少し違うのです。

私達が、グラシアス！と窓口を離れようとする、あ、チョット待って、とまたバッグをゴソゴソ。そして取り出したのはアルタリアの最初の停車駅であるサン・フェルナンドにある鉄道代理店をかねた旅行代理店の広告ビラを取り出しました。これは私の店なの、駅のすぐ前だから切符を買うならココへ来てくれればどんな切符も手配してあげられるわヨ、ゼヒ来てちょうだい。AVE(高速鉄道)だって国際線だっていいのよ。

うーん、確かにカアディス駅をはじめ、概ね無愛想なおっさんが多い鉄道窓口で買うよりこういう気さくなおバさんから買うほうがいいわナ。

このエスタディオ駅は限りなく無人駅で、私達が承知している限り駅員は出札窓口に一人だけ。このおバさん、駅の窓口業務はアルバイトだったんですね。

でも、鉄道の出札窓口勤めていながら、同じ業務内容の自分の店の宣伝なんかしちゃっていいんでしょうかネー。コレって業務妨害にならないんだろーカ？

\*\*\*\*\*